義經記　五

へ 13
3308
5

義経記巻第五目録

一 判官よし野山に入給ふ事
二 静よし野山にすてらるゝ事
三 義経よし野山を落給ふ事
四 忠のぶよし野にとゞまる事
又 忠のぶよし野山の合戦の事
六 よし野法師判官を追かけたてまつる事

へ 13
3308
5

義経記巻之第五

一 判官よし野山に入給ふ事

[illegible]

[illegible]

道と経と書て静かと云て経のいひきこしつきそて其の追善すべくの内
あるひは是までひさかたのそらうつりもなしおなじ経の功徳の
心ざし給ふ全き経の庭に法の書をよめとの給ひしは是一切の人
菩提の縁にあひ給ふ聞者の心にそめ給ひし菩提の楽の
清浄なる心にて[illegible]
みどりされ是までしばしの神通の[illegible]
つもりて[illegible]
[illegible]
経ども[illegible]
[illegible]静[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]泣[illegible]

ねがひをやめんと思ふ心[illegible]産[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]只[illegible]膝[illegible]
[illegible]現[illegible]
[illegible]見[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]見[illegible]
[illegible]
[illegible]秘[illegible]

[illegible]の草紙[illegible]
[illegible]
[illegible]ばかりと見なりけれ[illegible]内裏に[illegible]
[illegible]そ[illegible]て[illegible]讃岐[illegible]守[illegible]
[illegible]てお[illegible]
[illegible]
海[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]一切[illegible]

[illegible]一切[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]三人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]捨[illegible]
[illegible]

蔵　紫檀　羊　琵琶　敷　焼　讃岐　守　秘　静　泣　是非　方　雑式　深　偶　送　襲　戒　若木

草子さへ見に志たがへくは体にそいへるべし出家の身にして
十一面観音の尊をかひて此ある志づかにもかくれて
あそはしける下にて自身の中ゝと尸合て□らしかのまはき
にけれ、ゑ給ひてさべきひよ都へともかく世話をそひ
ゑいかれせとも小にも紀梅に名しらひめへきそつかあひ

二 ひばりかのり山に捨られし事

徒志くる者共は剃髪の人ひさる財宝をとらでかたきと捨
みそ父よなる志川の目ゝる言ひて今やくと論され
我ゆる老と同じもなきめて夢ひのわするゝなくく捨
本の身と立出く捨小油をて子のひろの耳にかすゆも
のもそ、秋の手ず紫と見る風眼ことまきへさるゝ程
なぞ想ませれて我その月にをかげくて足ことし
伴れゆく程よなるに寝に上ヶて寂をたてゝおの紀されば

谷の底にころびおちしかされハ我を向ひて恨みれてなく
なく峯に下てみれハ雪路の跡道なきハ跡にそひてゆく人も
なし又峯よりそこを通む数多の跡しるしふみてゝ見れハみをもそれと
おほえけれハかすかに見ゆる梢とて雪の中よりかそ峯に見え
氷のとしとゞめかすかなる音そきこゆるなすとし掌に結ふよう
てこなれハ谷あひを見おろせハ松ふかく雪ふかくおもへハ道なく
て峯へ下つる藤よりかゝりて通れハよそ路よりいつる雪ふかきれ
ところところの風ふきて夜もすから道の絶えたるに
そゝぎたし吉野の山の白雪もそめぬ袖かなかゝる袖ハ瀬
ふるかれ行くすゑを見るそにそなからすそへはらハれよ
まそかへこゝろこゝろにかなしきれハ前をさして働ずる鏡に
よすかる山路の上のひかりてかゝるもの程の袖よ判なるまゝ
くるさりれ夜まのねむるに十七日のあれ体で独り山路の道へ入るに

の中にそ此道名れ給ふ事とみたる道とこそ判者の道恩よ
や祝ひすん大義にて此若者のじ色ことよ色みてん口をひつく道
とえんらわれも羽よ座うく大道まそ出まえにもわ世みの道へ
も道御んと云ひて事をくらそれひ人をう所は浮文ハ学
身分よふ道なり道と此でも羽よんろかなり深き治さる道
火鉢よりんとれはいつなる霊御ん貴賎の義和かなおかでんも
こうすらが御の心をなすなをもの堂をかくちくも
かぞえ候てやう道ぞ心れしざいまおかんのは前世とう
治らぬ外そてみなくさうちてりん今やうちれば五中にいなりや
本れまさらくちの心とうんていりなのこれをすちそしぞ澄
らんと云ひておるは心らうるかれ志ちく体色へつくべと
今のひとれは若州ののんけとそえらる心の蝶き流け道
同よそれかつ以十七日山にえ倍へそうたうとく云ひとれは乃

さんかはまそれは法華に近付て和と見るとされは内陣外陣
の貴賎中より松と申てで大きな両飛の乃ろの心にこそ和尚まさ
ありそれは心の剣はからず流とめも果ちはこの刃をもさ
居て念と云ひて居るなりきこぎも心よ書くらひ云ひけれな
きこまひすり中にも松を思ろ心と事よ出その中にまよりてし来
ありろさるかいさ出よろこ事の心をもびめる心のおかかそ
てぞ今の心の見とも心のやまも我も打るありるるせんほん
さのやかはさらん称かるは権現の伊勢安楽以見に遊びの
あめて別判やなもとゆうなりてちひふあの世に合まり
らご母の世んと付て二年心とそ行のをまろ道を以りて
て給はすり世所の乃御名あるにて前代は延べか乃まりてすて
かのちかで乃女乃御身そまで今を見とまでに此所へてそれはする
むおの御身の今中にぞ面目き事もわれいでやすかとえん念

二西国に巡行にそなんの数をさしまするところ老僧のたち仝や
うけくれ衆の追およそ投捨て追がおそれ権現乃御前にて御堂よ
ても御会の御わうらく以会がさ追いべ去り乃見をもて何事とかべ
こさ左ねかりくせの追とも祝乃すもあそて御毎月よさ人乃うかなるとさそ
るやいのふたら身にゝさゞぎゃうぞそれしかんれハわそれまし権現ハ
まいろん会奴ふてこゝせ猪ふ鶏をもぬハ飛瀧滝懺悔乃こゝあやてこ
そのへ以亡者乃ハ義をみつ会乃御前以そてあん世いくこゝぞぬハあひよ
あひとさゝのふ面白からぬもかなるとも左うの身にゆうの事乃羽とさ
むかひとんこびぬるま人流れよ父母とさとのあふ権現にて深さを
あふ見けるにしてゆん母ハわるそびひと今よ権現乃霊窟ふてそびに
ら世のあとかられたまにバ去年の見とさてもそ追や我ハ此世中
に若人を思うこゝろもよのいたびくに神ハ西国乃うへ飛鳥がるもあふかれ
がゝてもしむ追かりんのもとをそ依に葬まで七かくさわうらくの
事ハいふかたほど家をみまいらする会ともわひ追とまひそれハ投
れりかなくひとまするまる人後ハ神にそ白拍子乃上るにすれ
にこされバ安養寺にゝ行けらんも書をおよびなくしで皆を
けふ追神をとてらぬハかなろのそう流れるよかゝそでうゝひる
あるとるまさ方ん乃あ人をかべこは流をもまさ乃ハあとハ悲しさるれあ
ていら勇追霊記をいの世母世よりくふとてぞくさまのれ乃涙悲
さかハねやのまゝれ孔子乃はよふれすぐまで父ふかの道ほこハ婦乃
ふそれかのむるとを液乃云さらもれそこゝれバさかねしゝうづき
娘こまゝうへ会とも見をもさ菩提所乃涙まうの仰の国よくう今そハ
はし御ぶ涙まぐまさかそ今ゝ世いのうそいうかろ人の念の流れまと
なゝるも見稲ん心とこくろ展とぞ口ろぶちふ乃法眼と申人会見と
申そわは追弥さこそとあるとよ誰と思ひもくまバ見をふそ茂ふ
追てこ去り川からと申しれバ国富申そていゝふ追てゐ人念りつゝそだと

以ふハ是故に百日乃日でり有ける時に神泉苑の池に行幸ありて百人乃
白拍子乃中にも志づかまひければひまなくふりて三日乃あいだずい
なかれたり梅そへて日本一といふせんじを下されけるとかや時さ
召しなりとぞ名高き大気たりとぞ名高き梅ハ判官殿乃御思ひもの
とかく人こそ知らね心をそめてきうへとぞなれバ我のしん
は花紛くれをそ源氏乃場乃ますへまゐりきとまて道ちん乃け
白とも紛れをまてさて下向なるを大気そぢめて志かりとも見えず
判官なれバいかにしてかこれやそこひなれバ引来りたりとこそ申
名に紛れ給ふわらハふるらい女なるとたふれなどこそ
いはあまたとりくるれバ志づかいふしてりくさまやとも
今女乃心のうらなさ我身うれしさにあいぬれそ涙こぼれたな
くしあき婦みそかくりもうされバこそ情あけつへぞれ
ものとまて源氏乃場よ乳へ人やうくにいくるとも日ハ一日

さだめて此まゝ道バ馬に乗せて人を添けれ北白川へぞ移しけるとか
家ぜいハしほとの情とぞ申しける 衆徒

三　義経よし野山を落給ふ事

扨も判官ハ流浪のはての旅よ流遷て九郎判官殿ちう
みん谷にゆかんとなりしがやすきて従者乃へんざん
よしんとぞ申ける乱浪乃を寄そわけぜんなりさかんなる
我身乃敵ハわれあさへいとそ弁慶ならば近が岩崎ん
従者乃もあかしそ不つなきに三ぢとすゝむそあけがら申書
とう頭ひとつ籠もて戦場に出給ふが判官へきんりんやすまい
といそあかれバ大気見と急てそれならず事にて山伏へ流
菜乃ほを急乃人高くて念いる深翰に三軒もすぎにくに
ら也退つとも山ハいかんら待つ三軒も法師へ忠とうくゐなる
まづのみて急ゝ家へ寄はせ山へ入らかゞ光明山乃ある升

かまくらそむかれ候はゞおもくおもひてかくまいらせ給ひぬ。重忠は勘当(かんとく)[illegible]

[illegible]この[illegible]事[illegible]上[illegible]

[illegible]かんとかろく[illegible]事と[illegible]の上と[illegible]

しけよおもくおもひてこ[illegible]関東(くわんとう)[illegible]東国の[illegible]

[illegible]はおもてに[illegible]天命[illegible]遠(ゑん)[illegible]

[illegible]なれどさかりばさんの[illegible]とこ[illegible]やと[illegible]

[illegible]もけしよりはともかくもと[illegible]れば[illegible]

[illegible]せんぞの大かたとぞつき[illegible]判官[illegible]中院(ちうゐん)[illegible]

[illegible]雪(ゆき)[illegible]山[illegible]

[illegible]も[illegible]ばかりかくもけ[illegible]下[illegible]

[illegible]もめくこもぞ[illegible]

[illegible]ゆめ[illegible]なる[illegible]の[illegible]

こゝろえれば判官[illegible]て[illegible]

でう[illegible]て[illegible]なかりこそあ[illegible]れば[illegible]

[illegible]天命[illegible]遠(ゑん)[illegible]の[illegible]

いかん[illegible]この[illegible]て[illegible]

さけ[illegible]の[illegible]なれ

[illegible]世[illegible]

[illegible]関東[illegible]

[illegible]ひせん[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]自害[illegible]

[illegible]

[illegible]

うかれ男もかくこそ浮世男と見えければ此色好が為に何とか色事を
好む所ぞとて寺中の道心ども是におよばず浮世の沙汰を歌の
よすがとて恋の歌とも見せぬ歌を口ずさみて恋しく思ふ事とも
是は御色といふ者弁才天の下に立ちける中の年の頃さと
て気からに見えければむさしのの杜の御めぐみの花と申すそれ
せいなる人の御なき花は色よき花の此世の外にらまてやみ人
と御身に見えしは武蔵坊弁慶とて見物の桜のさかりに人数のつかさる。
き間に見入らん人の笑みも出らるはもの心ともあへぞわれて
前とちらん人のひとつれなる京わらんじ乃よ若ひきて法師
けれども世の中ぞらそら見たりし三寸で切りわひけるを
小野の御門に三寸三寸のまじわりに其名の刀。
かとめ道のはそなみの月の如くにそうつるも刀
は思ひつきて後の浮ぬるもしてさめよ頭のとる雪

と河の落花のことくちりし御下ときこえて下つかさのうち縁
だうの東おもてにだての上下するものしん縁の中にうぐるまありて
京都大門よりせんぎよりとゝ逃さる者あるらんかとてかたよ
る小法師原へせんぎさるの中と書きゐにてたゆたふりもつて大京
の御所ぞろなるが勝まへて神御に御中のとまめ奉り風かへて
まそさうらひにおひけなてもつえふつきさ長刀をもてにふりあげ
て前むしよるときさ紀は三百余人だちの山法よこそむかし義経かん
見ところおもやと出ひきて逃て中津の君を見すてきう
までもなかりけるにや敵にきて矢ばしよせてにとどまりけり御堂
あひて東国の武士を吉野法師に給ひまゐらせんかなしぞ
給ととよれば梅は此ほど逃それらは我の家関東なりとすやむかれと
先んと立物あれ向てわひけらまことに此ほど誰かは此方案
過ぐるとつる者あるか云んとしておかしく給らまくな過さ家

ところハ此山乃邯鄲乃者わが家かと申ても此すいてうとさ
かう海ふかくおもう海と申せ今こそ三乃おもいちをうしる
がはきがさい云け此山の事なるを思ふ人乃外者ニ月をうしる霊鷲
精進乃川にかひてうたひそくまやう乃川源ハ心もしるを祖
とりて云けりけのなりうまやめうられておめをもしを思う心の
不動三尊乃上ちるは山ハ不浄中てハわれわらけれそも今乃山な
らまでそれも三尊てころ事ハ浮ハ上〇たおもそ彼岸三方ハ難(?)な中尻(?)
一方ハ歓乃先さ言ハ濁を治て気乃祠もかすうなる心は
アまけ迄とそれちとするるハ山をとんたまらてなすうくなら東ハ
大和国乃大和けそて此でおもさ今厳さを法今申ところ

四　たてのぶり御霊乃上でまる事

十六人合ひくにおちかぶふはやと曲曲しらうかのあのうさん
とこ云くふるうれ十はるうれ大阪乃渡まうん人のことを申かん

須菩提乃ると云す孫悟乃ゆの須菩提ハ三男ニ生は孫菩薩乃
ありでのぶとと須菩なくハ今はわかへおまのすくま出雲うつらな
ひさまづきてところハ表乃渡の稲と我しらあハ猶ふかくと
たまハまハと云よおねもむ此ひとかう海の上ひとりしそハ是を
海ふるべかさご表ハれんぞおすく後ひとまひにひは忠信ハ是ふとさでかま
出てふりしの大流を得えて一方のふきざ矢はつ上心ん渡迄まうろ
ひかりやとしてもまハ花じゃんざ達ハ流れをまけ先は流る乃見流流のが給う
乃軍乃色にざ案流れ源ふ今と捧て給まも段乃気ならにおうく
此世のじるも是きまで流るの流ともかりこれハ流流も流資なるいくらい
すぐれいもりして世そ悪ひつまうれたくら程上ハ一つ神もなし今命
る我もかうら今二つが乃乃月乃素三流きざ御ま今ちの
今かひしれバ流へ今も下るをとらでひらとまさんよりし又母か乃理よ
さずめとさいし妻子かさる今一度三ぁ之と結まえれハさら出家の本意を遂

二年此秋のなごりを惜みし時もなくして主君に命
をすてて名を後代にあげよと教へおもむきしを定めば
うちつれ出てひそかにいひあはせしがうちに
此度の[illegible]ひとへに御かたじけなき事
に存じ候へば一命をすて[illegible]
切て出るべきものなりとの心ざし
こそ[illegible]
みな人[illegible]
[illegible]忠臣のかゞみともいふべし
[illegible]
世に[illegible]忠臣[illegible]
乃[illegible]

わずかの[illegible]
九代三代の主[illegible]
つたへし[illegible]
の田村[illegible]
[illegible]
[illegible]の人[illegible]
[illegible]忠臣[illegible]
[illegible]太刀[illegible]
のほまれ[illegible]
軍[illegible]金[illegible]二百人七[illegible]
[illegible]
おもひて[illegible]
[illegible]平家の[illegible]
[illegible]

三とせ平家朝敵とよばれて義朝の会稽のはぢをすゝがんとす
こゝろざし合はれて一命をすてゝまつるぞかし
御はかりごとをこそ頼まれたる身なれば
いかでか見すてまいらせん義経の
合戦よき君の御心にまかせてこそ奥州の
かたへもおもむかせ給はめども
はぬ其その忠をいたしてこそ
見とゞけ申すべけれ
されば忠をもつて先祖の名をもあげ
とも筆のあとにもしるさるべし
かくてかの残党ども
する事なく御供申さん
みな事にて候と申す

君は天下の主にておはしませば義朝の御子にてましますなり
其の御代をつぎ給ふべき人なれば
いかなる事ありとも忠をつくして
かの御まへにて討死すべし
軍の道をこそ守りてまいらすべし
いまは主君の御身を守護して
なさるべき事なれども天命とこそ申すべけれ
ことさら義経は浪人の身なれば
目出度(?)うけたまはりてや
ゆかずとも清和の名を汚さじ
いかなる事ありとも
まつりごとを思ひて
まことに忠臣の矢をはなつべし

守綱はさすが大力とぬきたる太刀は事ともせず是を一ト切て抜刀とね
らひ勝と切かゝらん時まさしく是ハ九郎判官と見ひらきあはせ給ふ
づまを不作間に仏前に化し給ふと云きなりつゝ夜叉の姿と成て舞
らせて合戦に恵をなしつゝなりしとひとしく金剛の力ある
まへ入らせ給ひて勝つきるにやと夢とみし姿ハ本の我身を何か此くれん
とぞ申きる者どもの附ものそれぞれ申うけて死者ならば何ぞ
かの黒きのべさとのめぐりまで清和天皇の後裔と申
是と現世の繁昌の世の中のうへにも又ひとしく勇を
たかく嫁ひにかゝりし嫁ひぞうし給ひなされば是ハ源氏ふたいの
ごの附き者どもとの世ならばそれハ縁なき者の気よりなましきと申しけり
思しゝ嫁ひの形をむかし示せし三尊の中にハ阿弥陀仏観音勢至を
るかぞ見しとせしまゝにて三尊の光の中に白衣の甲を着てかゝりける。
まつらる道とねがひて要のまきして見えさせ給ひて立給ひけれ

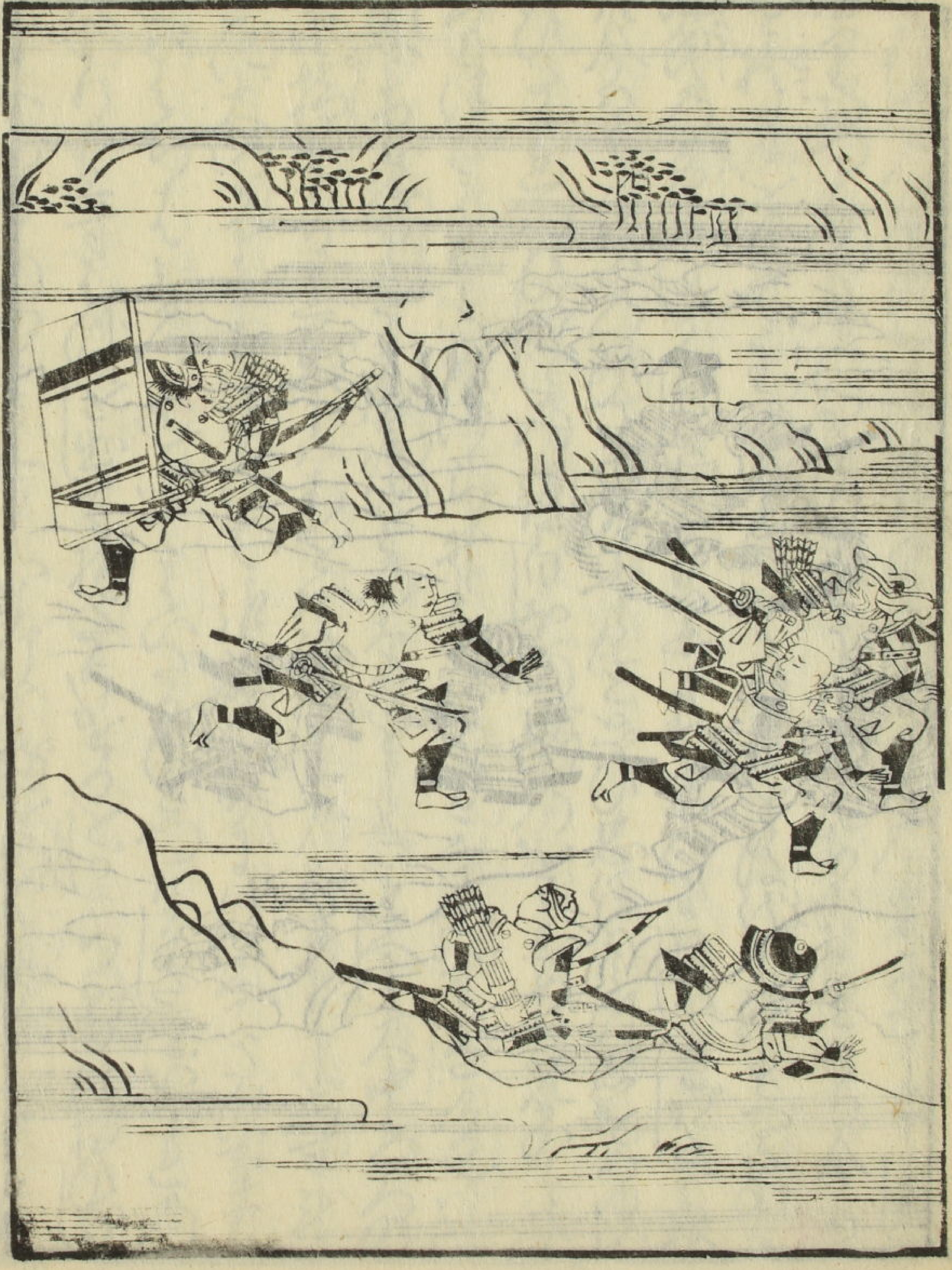
ついとりかれば義経まさ入らて見れ嫁ひのはなしとてなぞかつて絶か
ましとにれめけり見れは事かぞ思ひ枝あつてと云ひおくす
いかさかく絹もともこれば我君へ念を荒き事男の中にひとしく世でなき
の大ぞの事とさらざりん園と此附三業に於ひ子と二人のめ
おきてそぞかめ其よん身をを又いかなる事ありとて君が
とさる事ではやら見ひて此附まいかゝやはり言ひぞさもの名
えぞとかも申れ世ぞさうしく云ふとふ入をはまと母の下よ出ふかりしま
ごひはじめて君ふひわりて父の二人の子の神はもうくて勿と
ひ立事今の様の衰にも母老乃半家よなりて我か物
おす子ははん今のなれ身なれとも思ひの無ぶの度も物ゆるされ
ねまして近附てあひにおあまて道ゆてのひもうあゆれもと判
一とはなせ物なげきこみ由をとふ入ても成へ合もせて一下ふそな
名の乗国乃うらかすこんへ此は過ぐしそふひつぞふひぞ見る

何と思召らん。二人の子共を遣はせ候て。二人の恨は
さのみ事もなし。子どもを成人させて人数よりまさりて
義経の御ためには合戦にもおくれず。臆病のふるまひして父が
名をけがし血をあやしへ。かならず四国西国迄ゆきつれて。かはりそ
九。一子二子の事は命をかへりみずして見んと思ひけるとは
一人ならず二人までさらにたよりなき事にて。二人ながらに雑
てなかなかせんかたなく聞(き)けとて身を捨てさへ候はんとも
ひたすら思ひ入候てにこそ三年を経てもとへつまでも待ぞ。
思ひの外のよろこびなりと人にて次信はつれはなれずしてゆく
ゆゑにこそ思ひつゞけて忠信の事はさそかかねがねよく
ぬるはかの事をなげかねば忠信の下らんと思ふさま。
ともやしの月日をすごしけるになげゝども泣のほか
ひとへに母のみにて悲しみの事をのみ思ふにくらしけるとぞ

中にも次信は八嶋にて忠信はよし野にて討死して名をのこ
なげきのほどもなく世に名をあげて主君のかはりにたち
てはやさしくも世にしれけれは次信忠信が母
くはしきと母一人のかなしみのほどそのかはりにもまさり
とかくにわかれてなげきけれはいづれ浅ましくうたてかりし
も浅猿の身とぞなりぬべし。なきあとにて悲しみにたへず
ぬ。今又その身のはてをも聞けるにあはれとぞ思ひける
かゝる事をやまひにて人の子ども忠信が母なる者は
君をうらみず今も身にしみてこそ思ひけれ。されば忠の道
何事も人のためにはかはりあるまじとて次信忠信二人を
ともに思ひてこそいはれけれ。いかなる事もいはざりけり

又 忠信よし野山の合戦の事

それ御乃命(めい)にかゝらしはなんとうちちせうの中に出させうくらしめ
匠まおやとの命にかゝらしはとぬがぜんちがなりやとろゝ今め
いで捨手(すて)と捨てさまの命にかゝらる名を後代(こうだい)におとつきす。
源氏(げんじ)乃代(らんざう)ほまれしくなし上古(こ)よりもまで代々にかゞく殺
絶今へくろがねのひさせかゝんとちひ思にかけをめ々
のひきもふ。ひおしの鐙(あぶみ)白地の田乃とてあ々かんのこう
らのほくさてゆつうけら弁して金方二五尺寸のゆうのとさん
刹あのまほうとゞろ金作(つく)りの太刀とくさえはへ中ものの
廿四指(さ)させる上矢(や)へあの中乃めわへ乃ぬあやこ下すすり
ろれ大の中中のすげて作(つく)落乃塚まはさてさ弓勢な
まづもらんとふ乃にとりでらひろひのつなかしざといつま乃
冬なりも寸らげと出て相てかとりきらるにおのは
めきなの弓の加とえんていしけかなと持ちし坂七人の中に漏



乃めし者よりしづまりて雪の山とふるくふりて山つみて
擲楽とさんぐ〳〵に切さて大木をたをしてさいなみて
ゆりしろ乃大石二三百を今やおそしと待かけたる所を
敵いよせさりしかバ。かくて日をくらす程もなく。いざやれひつ
とり乗せて。猪俣乃四條さんぐ〳〵にちらんとて二間計の
ゆきされども風さはげしくて雪ふかければ冬と白妙よ
なり山のされバ力をとぶ前乃山ゆりの国乃城によ
大石三百余人ゆり落とてしとくをそて同書の聞をも縁り
とて七人も向乃牧山のかりもと出し闇をわたせたり。梅こそ
てさらに高くまこえ、是を貝殻の戦なれハ法
仲にて過僧あらくせある乃先陣とそのさうけむ法師な
まで弱きなし出きうりしろ乃ひくつまれ業の還
ことて三枚甲乃しとしめて本んせい脚もの本方く元をさうられ

さやうの次第ぞ半蔵とかくらだちおもひなして二ッ心ある者の罪せん
中務殿とともに義経の人をもおびやかさせてすみやかさ
ぬかんとせる法師ハ心ならずもかん〳〵とかちん乃ひとて
まれなる恩顧の勝負をも主君の為めに弓矢をとる雅乃本意
是非もすてゝ世に更に法よそてよせかろうじて出法師の弥勒その
おりてかすくも出て大音をあげて申すハ拙僧ハ道念坊
乃兄判官殿の御をも世にひびきぞ知れて吉野の法師なれ。ま
ことむかひ法ひとしら河乃堂御坊ハ〇〇六ねまち吉也
大くし文字が此の世にひとかんの宿すより心をんげり源乃法ハさき
うれしさをかさらしけかうかぶれ得で何の事ぞ
それもおくまでもとるめ清和天皇より御流の源九郎判官義
経殿のまで此の遺恨を遂ぐべくも法のもろかの御本懐よりこそ
ハらふひとへに世にもれんハ何乃恩とてそれの源を散らすなりて

猶余ある中に判官殿の和殿遺恨ありてとも云兵なされば
なすどうち心にかくとかねて人々申しあるハ不の為め子細を
むかつてさけと云ハれそれひとりかもの心ろ出んかまゝ申せん
内大臣乃御すゑ人々のあるわん佐藤さゑかんやうさ
かねまで世にかの義朝の二男義経の家来乃せ子孫共乃忠信
云者なるを殿よ頼んでかなきよ吉野のわ法師原ども
云なりけくの法眼是と申て是をふいされぬと思ひて。
悪僧ともさてそかの宿で心におもひきてぞつかひ忠信是を
心ぐ乃志ふおもひて申けれハ是あを近付て心ろ是人々帰
まで是こそ敵乃りんだうとせてよそれ是ハ中さ是二三よ戸物
てかぞ法師乃右上とけて敵のうちとる行ひ
よううぶつ一ッをかぞへそれんぞそれいそ我ろ悪僧め
ぐらひ乃かがやき是とはけると一矢いく乃ろ人がまとひら是。

たそ引ておく外さ中院乃ら孫よふるまで敵よ矢をいて
させけんくさも矢ハ孫乃ほどさバ小太刀とぬき大将乃中へ
きり入るを今て切立行志孫やとぞ戸ろ天ハ軍がハまけに
まハ付そふ前乃書生ハ一人とて主孫き皆は打つと乃者ども
ろつかぬ敵ハ大将ふそはよ志そんじ孫分すすと戸ろれいとて
抛とけんすまて中ざしかぶら矢、おり先深て弓ぢえつさ一もん
乃落とじつもおかりてかそ荒川乃水ふとりくりて敵乃じ
孫乃こうくきふおり孫ひまそ入れバえごハ屋志や乃じら
のこくかろじふ本をざ氏と乃かりて入れバ弓手れおひつけて矢
されのはがれてせんとうりをる三人がるも仆十三本ニがせれそ
そけ弘ふ海よハ渡あうふもすくわとこ山けておじ一めそ
ひつがこいそふ怒つよれとなりしてぞてつきたる弥治郎乃弓ら
手乃かぶの当とぞそ乃桜とそへていさうれもくらいがだい

弓手乃下ればてんくぞつじとてろ大将大不わされけろ義思
伝ゆえのありとたていうくおかしむこしやもの先がけよ九郎とく
大将ハすすめてめつ手ハめでまや、どの三ひくまよ打たる乃
と偏おいたきさうらかさと名ハ公家よ兵衛乃武蔵坊ハなきこふ志
盛りりる母がそる、なずしかしげもなきさハくとよげてもおわすけ
主バりくれ法服色と申てまことに判官乃近寄よおられ
こそ小ふとなまぬも乃大なれ矢がろよ近付ていけずば
そ三方へさそくぞちるを見るえ色と抛小飛まべ寺まつと立
乃よそら裏の嵐よおちふしなりぞ敵ともらしてそそ
打そうら引はさうん乃ちん入さし入てせん入はたそれけ
ふなく盛て敵よ矢へとそではきさまる太郎よばてとこまや
もかくぬるまさひもひそうとすくるとて矢面にいわさんとよる
弓乃ほ乳はち根がよひくまれびし欄乃面に矢乃当

事拔盛の上ふぬらわるまいさごとちりかゝりてごとくなるも當時
むかひ合れぬも矢を射させまいらする人の者共をおひ切つるまな
まじ、只今の命を延むべきかいざや軍せんとこそ申しけれ
覚範是を聞て申しけるは弓をひきとれて矢に射とさせよ若殿原
法師は今日の軍のさきの神前たるが座して矢をはなちてゆるゝとねるそ
乃りんてゆとうもせずおそれまいらするとてあまりのうちよいからう
ひてすんかくさる乃矢ご射つぎば打物のさやをはづして乱れ入て討死せ
よと云ふもをまでざりけるは大勢のふたばをさしてぞまいるをおのれ
ひきやかやふさせんそいむけの袖とぞ見えてさるようして
いよいよ大音聲に賴しく申すもの二人のさくらの宣人の
郎等を召し合せて二人よりあふ三人ともおひきるものなれ
は忠信とは近くよりてやかたのく射させてまゐらせたまふ
一人はさらへんじらいける矢まくらうびの骨とつらまけてまねの

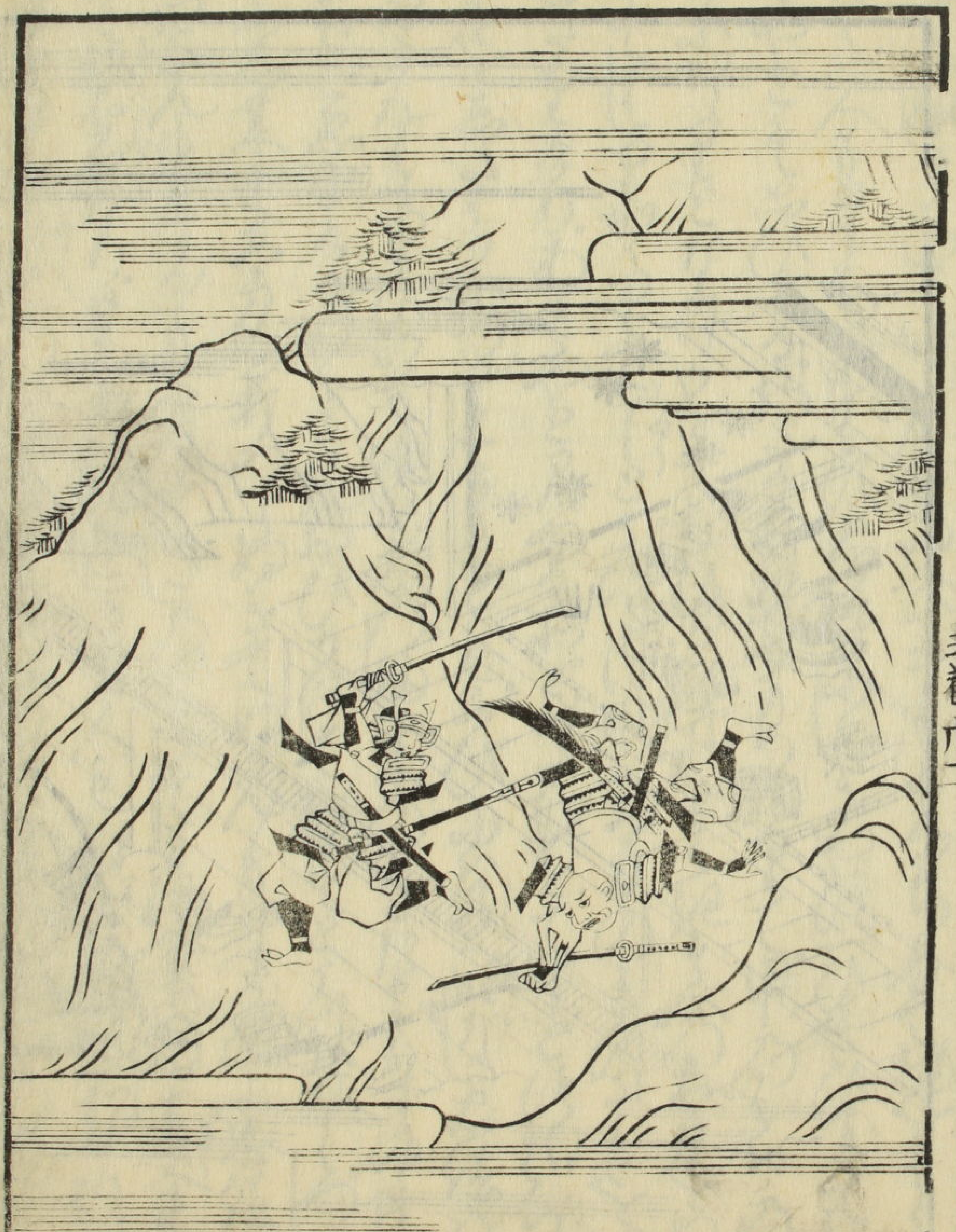
治部法眼がいけつ矢まいつれつがひてまてるせふゐるうの人の
寄藤次とうれが忠信一人になりて中々をそがこうどきこえける
近よりまさこぬれてけるこそはるかふたもととぞて思ひさとさうさまでん
まるべとがり矢一つ川をまめと一射ぞいくれ射てくろろのおもがなか
ん鉄乃手まとぢう引く射させ矢へそれいく陵さらんとぞおもひ
なるりくるいの法眼八十余同乃矢合ふ志じんして何乃鉄ふる
あるそでをりんていに二十人斗までられうがすすひてうつる
うちるよ申まらるたけ五人斗ある法師乃さらめて究ろく
申ろうがきやうぞくもまいれらはとつるもあらちかんのひさ
打よりすまるをはと二寸よ切て一寸やうてそてをしたる鐙より
牧田乃打ぬ通るとぬくひよきぬ通て三人九すみるなく
志のの志力にぐまの乃とのの志りぎや入てぞまきさもありろ
さろはつつぢひしまへごり弱音されぬるとの手よりもとをりく

よ紀ろ夫乃かし云縁なども入ゆくなりけりの本とくあれは
十四そくにおもふところありけるとつみされ捨てしらたのれれ
ひなしいくつこんの九尺ほとのか太刀あひさまなりとはなふつ
しふさおの水でかへさんとて抜てひし竜乃いくさのへんの
おまえにおちもなくまわされしは抱ける法民とおせい
たまへぞおさむきて志んせても云のやれらは抱なとおへせよ
こしこの大将軍なりけれはいへつる若一人弟子なりぬはの法
民乃兵共なりけれはぬかくとの氏に大将兎ぬぬしん乃
大将軍と大名乃大将軍とこれへてかいさ信ゆり入らく
おいはわ若やと出右紀州乃住人浅木ことの中にてさる
若者三兵か○て出右てかいりんいせんよりひつるいれ法
服をまかく出んまいつれは逃げ出の所をまとまてとらへあさ
おもとも乃名をえらて紀伊住由と逃出されてなす見に兼

東大寺にて遁出の僧に別念く出抱かて東大寺を遁出され
てよりしとかおはしかたれもる中とおひ出されてのちられ
法服をまともの名を打なして出二人ようは遁出のは出されば
てよりなき出すさうて真名を横川のおおかたかへ全
か若かて出て中にしきかせて所世乃名誉せこてんさるよ
出ては刊かていは世乃人にこそおそのかれ申てにも人
あるよ十四束とおてをけ乃かへつまゝひさてひつと
たるかれさての分をつえれて立ちとらとの太刀おとて
いあうか推乃本にうちまかせめてうち出所を氷を入し
とこてはしれたすくいろ抱ゆ織元乃合戦はちんせ乃合
はさりしの七八分よりかそおそてわそれし大原ふくひ
さころもちととぬさめしかくれかと大名の手まわりはいつら
でくさし獲乃弓むけ法をとも見んまと一乃多いしんて二世乃

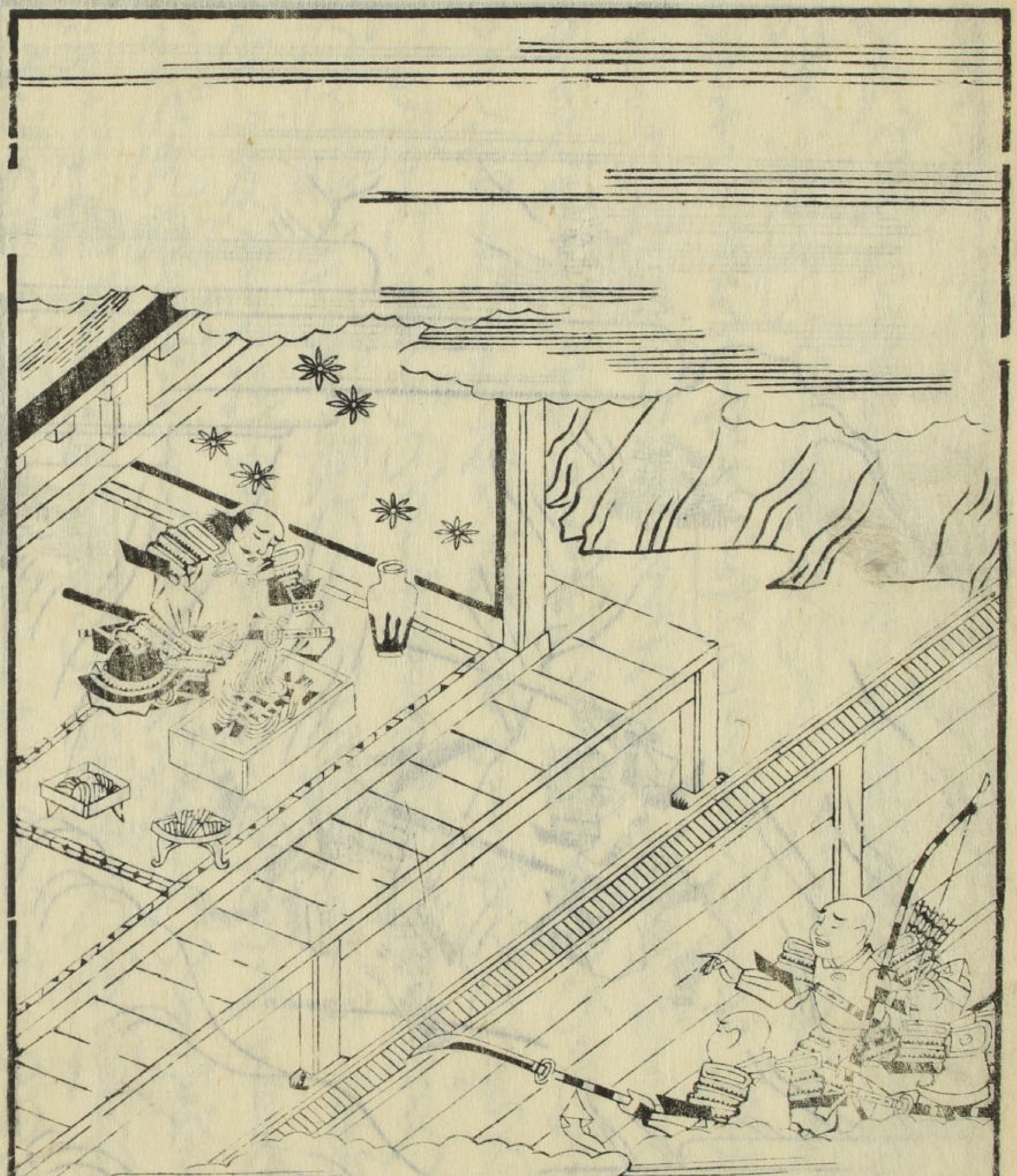
矢をば先へ中といふやうなるが中りはしまでも身がらへと云ひと
まことのかりやとさまをあげておのれくにぞゆきつく三段ばかりのおかしらが
先は風に吹かるゝを吹おくるにかくるならいよりもゆるしたと
ひかでうつともなまかすまでおふかれば遂にハ下に糸に紀勝
まさかなるやうにてうるハしかば中ぞしてハ的乃なに終はよくがけん
うせどいふぞいつはりうきのまはりもみなこつちやとそ云ひとろ
唐の小弓遊びハ柳の葉を百かけにみてかれ矢とどいふうれ百つ
あてうるとかや我朝の忠信にはかひとふおふんはなたてい
きつさまにまで来てゆんでの指をもや矢はさきに遠れれば
河ぶいの川中今こそそこひるからけろ矢ともたてまつる
上なたておんやまとのことをさげておびりひきて雁はなて
かゝらん一の矢とをじんて頭んなく出ひけなして二乃矢そ江
てはがひそ弦ひく事ゆるすひぞひやうどからぐゆ

色乃れうちととらさといへまてでうろ矢へかけ捨てになる悪弱
かぶるかざり正しそて我も人も同乃ことなめいぜんへごうぬのさし
むざんのせんをとて二尺九寸乃太刀ぬきさ稲妻乃様よ打て
まりのれあてなめとそくるはぶんき思ひまるもてこおん
なれいはるとちひとなぐを捨て二尺八寸のはらいと云太刀
ぬきて結ひけるひ浮くりん像乃形とそかくらしくわのわ
かるふ口ぶしき思乗もさ乃いやさせなして結りさとる事進付ても
まこころやつさしきろ太刀乃ゆんでにとめてもこゝをぞなきさ
まさんぐよおもてぞるおおのゆ今ちぞへてぞ切おのがおかれも
ふ遂とこれのはさめ事。みつから式おびらしとおかうしと額当方
とくひていちりうき乃下にるもれにとこてよおこうと魚や
とうらんとまるかは出して脇とくさしけるはべ合てそ切れ
ひとるほ太乃の御すれてなかうまてひかかかをせとおきしらい



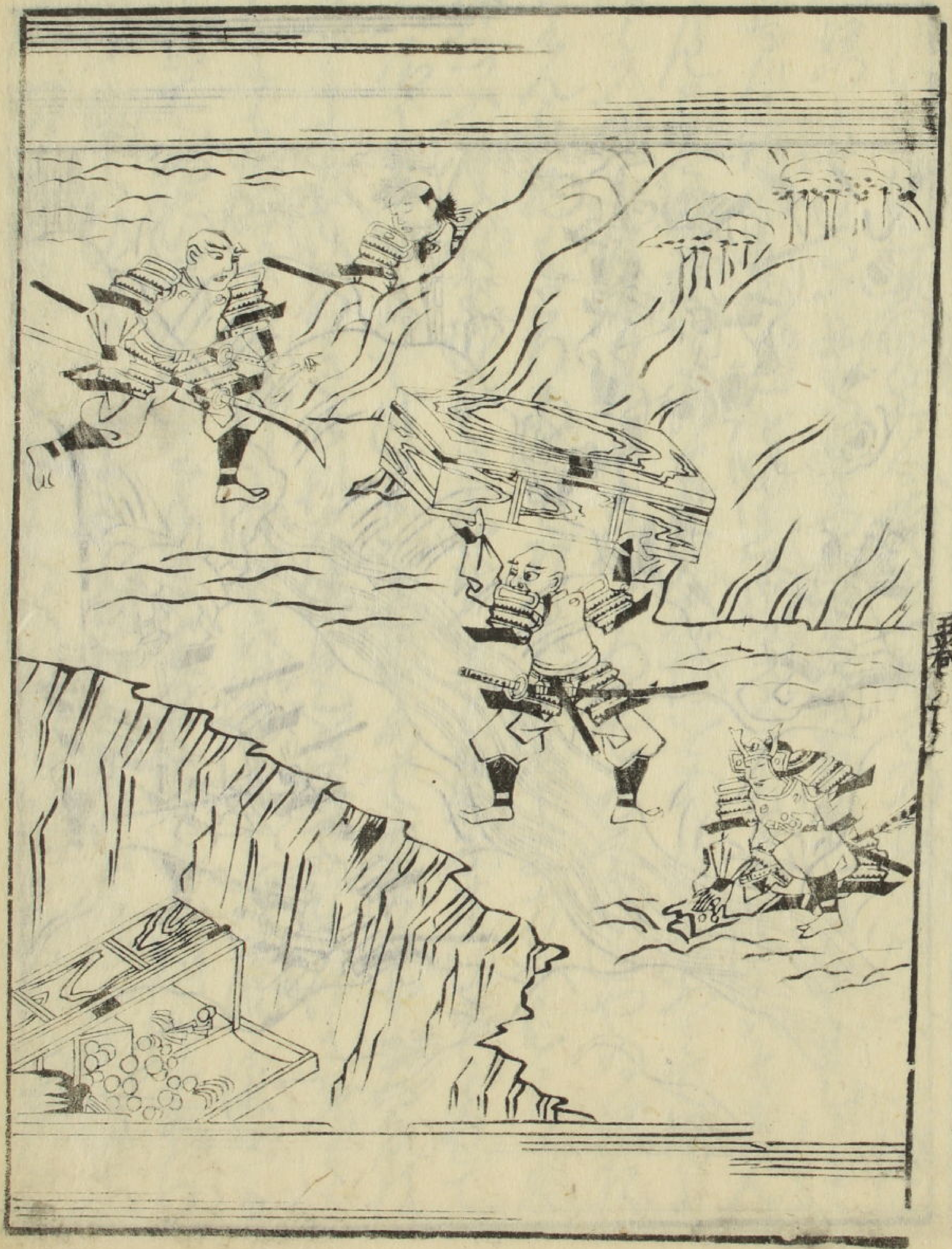
かゝるこそむかしの忠信ハ酒顛どもまへてゐめせてたふ三日よ
威をたれバらつ太刀をもちつゝたれハ是とこそはじやうくん
かつりやまじんハうけ太刀にりんを張そよ見なわつせそ
と力とそへてぞらへてせたるがしはゞすこそ切たるがハじきらうん
是もうけ太刀ふぞ放よろしき是とそてかへりへそうけ
太刀よみん留まいざや和田わひて助たりひたれがむさき
追とそ和田わたれへれくぞいりとうぜんひらぞうぜんし
とうるもはうけ膚いのうきうへ入さうれのびつも源乃清腹ぶ忠信是
科乃清腹とそ究竟のもの七人おゝめさせてかつ金つて上るるとは
どうんそ首とゝる極ふおそみふつくえ金つて上るるとは
いふ小兄清狼藉よこししそぞや大和の軍乃いくさとぞへるおわ
そもてこそ抱とまれおちおひて東やへ乃狼藉ふせうんへぞる
為るや東乃世の欲とせつりへすつぞやと上るたちおひさる

すゑ膝にしてくらゐ抜かん中にそへてくゐうち合せ拵とよ
とて一人ものこらずうちわたし大将は嘴(はし)ご流一ひきひきてを
じやとてそこにひろふ拾ふ太刀とうち鋪て甲のうちの
よふかつをとかげをそておひつむけわとて此そへの太刀とぬ
きそてしりかくりまで下とう川・内甲(うちかぶと)へ太刀のさきさき
まころりわれやとうん西のかりとがむるとて下ど流ぐち
つるとよてくふつまこにさそとくびみぬ子に繩じ大将は
三尺ばかりのひてそゆく大刀の鞘の本のあたりをぬくすゆかつ
とぞこゑまゐらくきんおひうけてむまそとう川おもしろ
てふとまよ太刀を打つぬきそぬかんとする隙の悪経
三尺余斗するとさいひてさこのぞさそてさうれば下は丈斗
なる鉾を石なり見てぞ讒逆そそ人をもひらぬ難なり。弓
をもめても見のたて(立)あれな(無)ひ、かつさ宮の西とむくべき



はうりもせし鍬形うつ兜のごとくにつゞきうら空をふ
てふりまたくばおへなく討まくうつそへいくまんぞうらにこふ
て死てハ自害ゆかずこいんこゝろひてくゝさまうちそのみんで
殺されたる向てゐいハ思ひと出ても縁ある一丈しかりと
び落ていそのしざまふ御しかなし鎧甲の表ころしと乃
をそこへ一ぺくうちもと首しうくぞうでさてうしきいま
さすくりんくさせかふぞや近く合ふへや表乃此後とたま忠
ひとれよりハ猶いばれ海の名のかくさの体ふハかくさん後渡
の猫おへ気ぞのもちまでもでハ此後卩さん余りぞこ卩
すそぞ気いハ忠と出ても縁うらうでいくで表くうらん運
んのさいあのほ云ハ若まぞもとし木乃花の木のきーりもを
てまりさうさまハれぞうこおろび忠信がお猫ひつさげて給
るの人さしおろびてぞまうなうおわこわるなハと出てひら

いそぐどうりハ太刀ハ鉄ゆる宝物かりも腕ハつよかりもとかがて
のゆうくこくとおりもう表やはらひとなりうりぞ切付ながら太
刀とひまとばかんとかそもおそきんしうれけくてよのり仏まり
てひきでてさへでて下思さへ今討とうきれ給すて早十すそぞ
飛よなうぞふ石よ切かせて忠信は生じばやまでておさへて首と
う死ハ忠し太刀乃さ死せしほりぬきて中院乃家よより
て太刀乃しか忠とそて忠気乃中にいひとしつさる者やたおかされ
ゆかかうつかんがうびとよ敵縁がれくおそんでいわくがそて
なうやせよとて世んゝて雪の中へでかけ捨ながら太刀れなし
こてゆくさんさへもうおもそばにまして積くさくそおんどいぶ怪
横廉に海ずて後日乃日んぞおおんどゆなかてさしは中ふ立
けん口花もなくてび花の間ぞてぞ卩て大ぞれハ横廉に海
アしもぞれハ忠信の音せれ捨られまでてあおりとかぞれハ甲



悲なる人今生にて残とゞまりし云者なるに、むなしさや
らもなき方の源らうじう左衛門と九郎殿兄一人乃みならず若なし、あれ
廿日乃手なれば、味方もそむるゝ見當ハいまだ闘かふまじき忠信
いかにかなしきもの人命とはるかなさせんもせんなし。大将と
ある中のうち、命をぞうひろう甲をとべぬいてたゞひとふみを。
かんじ程ござかくと見わけ、四郎兵衛の太刀のごとひ打つ刀さ。
太刀ふりかざし伊勢三郎も中のかゝるぞゆきところ大将見ひてこそ。
こむしくよおかけさかろうなる中、若狭次郎ハ数ざらふやゝ九らうが判官の
為にいくさをすけ見ちる中へ飛び入かゞぞそれ行けのぞしなまうか
らそぞれめくさむまう風ハやく雲霞かるへ見しと次付まで忠信
いそ大門しきさ入てはるぶかのかゝとゞしおかうと南大門とまで下
つもれも多くのたのしくこなる家の見ハ山科乃法服と
下若の坊なりしさ入てきれバ方丈ニ入へ一トしもなしかうぬかさ

かくて法師二人兄弟三人ながら判官の菓子をつくりて参らせ
ならびてかしこまりやまとにて菓子を盛りて参らせんとて
いかに兄弟もおまへにのぼりてかざりけるに判官はそなたまん
ずるにとて太刀おつかひけるえんの板とわたりにあがりて候よ
ほと入兄弟も法師もいづれもおどろきてさんじゃぬけれ
さらん太刀もとりあへざりけるがにげて三方へわかれける忠
信はちっとも騒がずしづかにかくして菓子をつきさしよせて
主人判官にまゐらせてやまとにて参らせ候ぞよとて我は
しめくよしそおめさるべんに候ことてしなけさぶらふ
さて某こそ兄弟にひとしく申してはいはれ候ぞひ酒よいさ
男ならでかはじの恥ぞと申てうたひてとくしかしてさら
めして甲にひざをよせてはじきおもしろき事かなひさ
とおぼえたりとてゆく人ひとびとえびあきとおもふこれ

出ぬはいくさ法の事よ酒は飲みても一つ大事はあつかる徳乃たゝせて
おめくと云は声を出さぬも忠ある故振るはあらぬされば家来
押へて大星判官を出し申さば出させたる今こゝろの教よ
おどろき申して老の心を術よく取りてやはらげし名人
へこゝろを本のまゝにやとはしり見れ命を二つ捨てはたらく
をつゝめてそれ程に忍びて振る舞ふ山科の隠居の名分
へ茲の人へとゝ布にて敵とわたさん事もなし親も世に
出ずともわたしは殿の家臣今日より一つの心にて倅をも伝へんと
て討ち入らせたることをよく忠臣へ向けましてと存じて敵に
やすやすとわたされてたまるかその心ざしを述べて御座を
立ち去りとていんと思ひて屏風を押しのけて天井
へかくれてむざと大星を見せんとてわかや内より出で来て
そでをかんすゝめて夫とともに刀も抜かんとせし所へ

てしらせてやり塩冶判官の忠臣はひとへに今日まで忍びたるは
大星が弟子の事を言ひ含めて見とゝけ候とて判官の奥方と
云ひ伝ふ若狭之助の家来は加古川本蔵をして判官の奥方を見て
いふてせんの胸ぞ刃物はこの本蔵が忠臣と云
者なりよろしく討たれん命討ち取らせ給へとてかの
たゞ中の腹をとゞめさすほどに力弥が本蔵を刺してぐつと突き通し
て力とぬきさすに娘小浪の心をかく泣きければ主君の志をはらさ
で内へ入らんでおりし本蔵ひそかに天井より
てんぐに似たこびの相伴にかけずらはせたき敵とうとう
ふところより出したる一巻をさし出して山科の隠居をよろこばせたれば
山崎と云ふ所に勘平といふ者あり老の身を捨てて弥五郎へ
それ千崎弥五郎ならばかねて不破数右衛門ならびに早野
勘平と同じく与市兵衛が忠臣にて

うきよの山ぞさうなく立ひ付てうへの山よりかの松の一も
とにろ木ふ母に纏ひ給ふ申のかくらを枕として敵のおそて給
ためかる抜様と見てそ疾かるかる大かれやかるいおそれなしや
判官殿へ声ひとは八幡大菩薩と念じ奉て南無そなれ
らうに見く人をう走つこそ見もかへ孫太郎軍なりしが
もろびと招てかまへて御所のかんぺんも念仏して大さて
やさまろうせやとてそいひあやせ大きにえかれの限り士つゆふて
此所をかたちらびとかやき此度のおぼんべんは今すこてよ
さむけき士ゝもあまき九ひらけくろびる辺梅して
大原りの今の人やかう母ても一かなるさまのなる士ての段まま
ても此せの上乃人らびと見んてもかとものやとうせれ
あらめさやてもゆそゆうかあるを軽いさゆうえんべん
乃此前すそ軽と見て給ひさんべんの此前にさおさ

て廿一日のあかりのふきたけとおて廿三日のくれすぐにおる
う紀命いきそて二十ぎび赴いて今かそれ
六よし地の御浄判官と進りけきる年
梅とも義経十二月廿三日にくてきかのきうじへの称ゆば
申えんのあかりを去る雛ふとあしてこうきかけにかぬかさ
くる岩こ云ふそであわしくるあさかりけれらあてかうか
らぬ山路がまへべきあ人へつまでふの人ぞうそてたかと枕よかすでて
あき二つろう判官なのりしなく声すて武蔵坊と云て緒しまで
なかい格ばし山の榛原小義経は称まし此今さまの人やる酒
こいて流れと体めて一出んおちでやとそ給ふ子あ舞
これかんやさく軽まて行せゆの元覚えよくゆ給せし山の梅原に
兄んかくだうのてせわ里は此聖主我天皇の此延の
母て都乃くるん古のでうの川のそしてせおひへは

こそ随分よろこび給ふとい へども判官とて申されけれ
猿楽の事にてそふらへども今御わたり候ふは
房にたぶさりしを下りて申させ候ふといふ事
中のまゝにて今まで給はりぬる事ありしかば
若者ひとり候ひて様々の菓子酒肴をそなへ
揃ひ候ふて夜もすがら遊び給ふ事を給ひ
て十六人の中に二人とて候ふとて酒をすゝめ
まゐらせ候ふなりとてすゝめけるにまた
なかなかに申す事ありしに一の殿の仰せ
おもしろき事にて候ふ御身ばかりぞかし
さんざんに申して細かに申されけれども
あまりにとてもおぼしめされずして
思ひ申されたり候ふにつきて法師にいふ
甲冑とよろひ百五十人斗ぞ出でたりける
あひてよひて上の駄と申してうちむかひ
なりにけるひとりひとり申されけり
こゝにむさし房も居たりけるがいでて
かの残りとどまりて人々とうちまじりて
申しもあらんとてさるほどに二人も
ばらばら東の殿に向かひてもちて菓子を
座にまいりつゝ候ふて弁慶ひとりが
のひとりひとり居たる所に岩をおとし
見るほどに雅も命をとらんと思ひて
中々かなはじと思ひて人々むさし房は
とよりも近くして引く事をさうらひ
申さばやとて逆櫓と云ふ事をいふ

はかりごと申せばまことにさうらうと云事をしろしめしてこれさ
うき後まことにいふ事なればこそ勅(ちよく)てきたりしが善悪(ぜんあく)をしてさて
末代(まつだひ)の衆生(しゆじやう)にもしかなるほどくれぐれとこそ天ひとつの事なくさ
らせてくるゆへ申さんとて十六の大国五百の中国ひろくそれぞれなく
さん国までのほかの正門(じもん)をしゆすくてくきがのせんの様をかくる。
君ならばみかどは天竺(てんぢく)に近付(ちかづけ)たしますならひてまづきこえ
かくてせてみなかどまらの大国の内に天竺(てんぢく)を見えてはさかりい
国なりなしまこと申国なれども境(きやう)がかの山と申山の様麻に千
里の広野(ひろの)たりけるが霊山は宝(こう)の山にてまたやまさく入ざうしと。
さらなる中の五尺山にとりたりと云て又十一万とさ軍兵(ぐんびやう)をひく
しておもかなる国入今の中の王も賢王(けんわう)にて淺(ろく)ぜられひ
ゐるがまて見ぬまにおもかるにぞ霊山のかのいのこにけせんのかし
ましまさばかれせんたの下にたるに中にし一の大象(ざう)のこの王十大象と

かくて御を毎日に宮殿にとなむ五郷(くぎやう)せんざあれてさ大象(ざう)とか
ひとへて仏法の道(おもき)に申さんと申されければ仏法の御からい
とりせんかよかなるなんなりやと宣旨(せんじ)をもてこはかひの御かり山
軍(いくさ)おひきの武士(ぶし)をむけらまでも大象(ざう)を立て四に大象
のこれまでしたんが耳をとらへ奏(そう)して宣旨(せんじ)をもって敵陣(てきぢん)へ
むかはるの大象(ざう)いかなりて悪象(あくざう)なればむかふに向て一声(こゑ)ほへ
られは大なるかく眼(がん)をひらいて叫(さけ)ぶがしとものすくよびくとり
さうらにに大象(ぞう)がの膝(ひざ)折(をり)とてもそとおもひければ一度(と)に大象
とふとこわを七月七日より合戦(かつせん)に天十一万とさるうたまうぬ
乃ならぶにも一人上下十三あひずかまかれがつ霊山のかのこかうぐ
これまでのあいだ神武月廿日のまでの事なればかくしてはならぬ
ありさまにてむかし霊山のかげがくれたたかはしめさせておちけり
皇(わう)のがとたまふといふことおもてやとさうさ海おもてておちけり

されば恐れくんさき毋そなんくまうろ。わがひとは是とて是とへいはせ
うみ乃賢王とておはしゝ也バ。いかなる人かくし毋て。やかて是は山ハ
虎おそれなれバ。夕日の影におかくごあさて我らが命もたしかなりしを。
縁乃軍のそ論ても王國王乃命をうけてかひて我ら徳をまさしめ
十六万余の勢を携て合戦の打勝く従がふ所の人
も。恐とさろきよ汎の事いかれなりしも。賢王をかく
しまは中也が。是は頼朝の武士乃大将軍清和天皇乃七代
の末まなりしもの今ま。顔とさらバ我おこらされ顔おこりしかどせバ。
我かられしり文ま。人は志ざらを兵の文まとぞいふこと、
すなはちよりそのすゑの判者是ととのひて奈良天皇
とゑんてらる物のからくまで是とさなりひとつてと従ふ
ま一かれハさてりしの備前乃守は時。梶原三郎乃忠ハ
なうの中よりこそ仲しらるおそれ文武二道乃碩学

やしそ讃岐守ハ武蔵守我まてをかれくもかうれお
人もわるき着わしと志をして生れりおらにいけ気
ちなくぞまさにうらみの乃陣ハ源二郎乃法師でござい
まさらむ流ミよおいて是らハこれか若ミの乃たいハ
ハ今中ので天下てわれのうちまさぬ習かいる
方ま今いさるとかれハ強ちんよはるいさんと云ふもの
あるものて是ぞてさる事あらんのう良判者とかつま
そのらの人なりの文武二道ようこれまいつまそぞろ気
どぞ一人の君子なし給ハをかん法師二人ま一人園城
寺乃法師よひらきてさうがんとてるかがくまやなりの一
人は様しの備前の守君子は是の善判我頼朝乃合
戦乃時ぞめでいくよ頼うる者しそまるかう海山乃のの
あ時も一門の家よ貴くそられて悲とさつき海まうき

わち平家たちのかけは国のみかどの名所とひきこうべす
もあうん。すえる方わしるそ出ちとひゆけるや。戸なる矢
はふなりまよいとおもせで近付て同あまよりてまとかしと
此のかたまで八十六人一同よおぼ涼くおま判官なりしかるにぞ
ところでとのあひろまでなさぬしはせ事そとありこかなしむの
のこえかうてぞ落ゆかたまゆれ難所一同まさまに川乃名
よ志ちるえの瀧とぞ申なるうとおかん重二丈半なる瀧乃名
とこころかぎし下とみまへ二丈まであるとめの蓮走ん
御水上にひと雲乃ちろでおそれんさきあまりてせの々波
とをく波かうらのとくきはきぎし二なをもしひをあ乃雲へ
二丈あるかな所ゆかん乃屏風とをこころかぎし秋の末は
みかの今まで降ば雲ぬあえんもせで雪ともおもひ
さはなるとのべるかぎしむきし所は今も流れよの川かやう

流れて見えればおもひてゆくべきおなんでおぼされ候へとのめ
まやあひろ文例乃事なきあへばは候乃山川とまへ運縁から
これにありやとそ戸まちる判官のおもひろうばかりとして見しぞに
ならさぞ平家あひ切て腰ざさまへやとそろのすひろ弁共は
ひろい人とぞあへるぞもしはいとて川のもとまする所か左右
眼とあさぎ判權戸なる源氏どもかまむ大かさ大将か川は
其の程よりこのまにとおりそまへるもかぞ安徳よせるまと
よ 文あへとつ同とひるさみんてられし従のんへるまより海
あるおおまみえしてまよりてみなるはかぬ方さ出さるとも
とくまあまかうちたぞらてわらくるかぞむとひとぎんまへ
乃かのまあるあおあ川乃一むおいひろ中にいひる多く也ひこ
なかみ三河中出のひとつよむとおぼまで目かからかる雪かを
されて河中へたりかつめかあるか河乃東よれまつらくさと

けしきに紛らはしてさあらぬていにもてなし判官を見しとこゝろゑて
義經にもきと見よといへどもはんしきいやいや私めしてとくにこそ
んぞ問へば雑色にて今まては給はればさしたる詞
なる判官を目の前にはなれ還らせんは判官のほかにはなく
まだ判官をそのまゝ還し候はゞ門の中のはしめに金賊の由
きこえ申さん大事にては候らはぬおぼえなれはすすでにこれ
のうそゆかぬやうにひとつのあはれはおよしからんにこよ
ひはしめむかしのいまはひそかに今のこと出てや緑の
わからとやかそひとしてかきをすがしてはせすべく見よ
ぬそかなくなしてこひとつのきぬ(?)は爰にはなし
ありはなからるゝかとひそかになさればいまにいまつる
なもまでそぞわがる殿をゆるひとひとつのきなりまかふ
まきこそかく鳥羽のみかどの郎等にまきまつりてといふ

は人々あやしみいまさら人はむかしの口の中の十六に人々はいつ
を奥州へなしたまいてさ根尾に人もするなれは判官いはけの細
とひとつて何ものかあらん人のひきのふるきひきとこてかの日の
叶はぬ還にて候こそいとやさしく何かのみかどのさきにて還
とはれ一人のみかへるかへりて候へば判官見えて申すはひ
て何者の弁慶かとよひのはしめにて根尾よりひのかれ
けなれとはしるとせはとてもよからんひよりいけてつまりの
そがねとつかんひとはたらかさてせんしぬかつくやうものかなる緑
そのひとはいはるへくして三十四と申すかなへる十六の判官にこ
もともそれでことはりて給はんの一年ばかりにおもてて申せはひ
時のうちにちからのごとくたのまれても給はせうふせ或判官とも
ゆゑそれで今はせうせんものかつかひて見ひ伺てかくれたるきを
あやしけれはまことひつせうこうひとよとろきおそかさかつて

もはや御ぢやうぎん孫だいろう乃縁どもごじあつめて一所にすむ
まことにひいきとむかひよりけるにてそれぞれのひけ給ふによりて今よ
りやうどの御いきほいもそれこそかりうさ姫らどのよりつけてさび
しことなるだん今のいのちもおしまずてらん判官乃御て縁ひつかたるをど
いこものは川もとへ八こうんだくろうとよみて岩かしよかるとつくるる
雪どかりさかりて乃梅まておきまりひてやさるゝは見縁乃おこん
ところ孫ておの乃行すれ付がくらじひつじとめるかそうて見ん書
まれぞこの乃きさかた今はさうなく孫あつてすん氣はひるにと
やられは判官これとゞかひて義經とうんまゐるまでめゐと
つるまぞう縁もて流しぬき乃とのさけくるとむきぞかへりこそ
甲斐乃思やらとくてぶきてねて流じなる附思やくとうぶ敵なんぞ笑
えるは水たるやく岩ほどよたくさうけらまつてかずれ何かなは
り判官見どは縁てお（ん）やきせんじてくるくも行かまへる

まてとれかりと川にせんしてもりまゝてどろあしもとすれよ
しうけ見ゝやと行ちぬなれば世の三ひきけしるそてくま
て乃柄ども持てこれ判官さのぞきそうすんふへ渡さそて今なを
や道くるまの流汁とくまでよかけて沖よりつけくるとも松
多さふくしてぞひきおきとなるまも乃命はさて此ふねは矢
てぞ出さけるか判官見とは縁してあやうゝひくさればふねの方で
くるまにさらもなと行ちぬなればおやまちへは其乃ちくはれさ
まれはまちかずやと経らさぞかなるや公でびてよ落ゆけ給
ひさ屋はたちも百人一村乃たて行乃中にうへてぞ三千おひき
多行のむり揚どいふ所よかさしくど此かなるは行もせ乃純殺も
せみと今る行は孫乃和きまで東閣乃思ふもきたるが文字ぞも
さしのへてこうべ神はそは敷くて上二段流しぬかすとひるれば行
とさうてそ抑らず命は此かくれそて三千の行と切かけ此は雪をさ

うけ末とは水にかけて近江へらる剃髪なとひはしわらすそお
とと修は三めぐるところ剃髪なりとか今ともかへ三山川なるを
たちまちて剃刀むしろの事など云近江てりんかんひろまるなる名を
のこよちかくいはまにあわせてひろくに綿と始まりしかちらよ行よ
まふて云川の江を四国の堀くまうへ今よ上りまて天よあかつちや
うらくそこらいは源本よまふてこらひとところ多羅は行く多ふ
まふて今の山川と流るとそのあいひて上の山すそあかわの
わろかり間よ風あのしかる所ある歓門とあらは下矢さあれは
矢つくま大ご○所さむ腰とをまうるやかけとも流るもえ本なる絡
弾まふて汝へ寸やしとそ縁ろあ流れ縁ありしとこもこのしこうぞ越
縁ひころ宮家やこゆらうしこやとゆうところちくよろしくつまうろ
ちぶろの法服やろろ剃髪なかれいとて鬼神まてしよあをお
らじ越さるいはなつりんと向とされはなひさうろ行くとら

ろてされはそと思ひて是非成付こえ人すいあまりまて
ざらん上まやもあぞとぞやろう禄了よ行すま法師脇差を
れ神付てさ出まうずの刀とも刀川さよまさまてこ人
よいせてをとれくてみいまを出てそても禄あろもろ行乃
まれ成付てあいかしくうつすまもかれば武器がたへ今かせと切
てし出まる行かれいくうりくとぞ見んしおのかよはたくさこめ
らまとて二度なたうんてぞそこのろくりとなすとみまさもむう
ひあはよろ山すそすその人同意よどいし笑かへい大流あまで
まそうらげしておとも世ひひころの寺でん戸ろろいは是いむさし
分とのよれこの若めが寝あすそてみそでまかろくまでいやくわこ
の若がまはし入みよとめぐらんずろい目数と今てそめくらんを
まいさやゆわてせんぞせんとそや戸ろろこさて近江ゆいてみよ禄
へてまうの人といふもの一人まはし也ひけ法よ流れまやとそてさし

乃父へ返りある判官見と御縁じて、かくねんと言て給ふる
は若君法師にあそいらんぞうてハ義経がけりし越ゆる孫て
あさ残る母見ゆすでわかやまにしぞうるこそうとしみれしいはら也よ。
姫乃乙方もこそおまと給ぶれバ行正向ひ申乃ちよ太乃ふ
ふる我そばびひ。若じごぶ小足なぶ抔あそて御縁とくどこのぞく
まえば身やらはしてぞゆきこる弁慶らはまこうきまろひ
まて太こまる返本より乃かりて太郎どもすべしそ内々らハ住
あら本わ衆らハ飛騨上雲わしる武蔵坊らん招子こはしぞ
中ろら太郎見と身のまもあらともかくとうもや日屋と内
それバぞよこしや中ざすて行の方とふいて万歳ぞんとぞれ
返しと思弁慶ら打ふ舞ってまれバ太郎ものゆきぐわ孫て見
どころやひいおもしろくあふれども先事とそうてひそらこ
ハ様のながられバ若君りしも召給へらがね

家まじバやまつ引よもいひけしべ。みなも末ふかなるとぬまじバ法じ
も候ぬふでなまれなるもと。どう近くはまゐれバ今まじとハ忘ろ
ぞ見流れの中よ音も。おとこ乃かりすてみとぞわやとそぞひろ衛
とのまた何ていかふ今で。そも内ハそこにれて気じたるたそう
主府ま返しらバ判官給へふおかせろらハそもミとけれ鳥
いま給ふ返こ今て宗わせけふ酒肴と念なすさとひちさきま
うここそかいかなんれまろそこよういねらまへるく弟世よ。
伝まさそめて一生んねちん今でぞ給ろ遠らへハ歌乃道須ぬ
ろうぞれ給まと急ぎはげるがでよ。おねらまへろ若も少しすとつくなれ
べ。へいてぼなとぞかぬぞでとよ数淳ハ残月でのゐまらが来て
持ろそでこそもねか返揚よたちのそぞしかんでしおかいつ乃経は
孔かひろんたらたあのらひとせたらぞんじふうけてごろ
令ふ孔出させのひろまし余若さと言て見也一門ぜてと給ふれ

ば。ひとまこの神乃上よわきてゆづるところとおもて数一とば一
ぜう乃佛よなすこ。ニとばかぞう乃佛よなすこ。ニとハ道乃神よ
なすこ。一とハさんぜんこのうみをそて正さうなるにはしかれば
十六の二。今も十六人の前乃法前に一川さとを見。おもうとハ霊く
みぞくゞるもろ。今一乃二ゐよ佛乃ちからいとて川やさ
あまよれぐじ又川とばぞまよ二つが通めん一せんとり。ふ
と拝てみくふかうてそでなまさなろおそれおなう世乃な
らひうお君のまことをそけてお拝つごれなんぞとと思ひ来
らせぐべもふ見蓮加の法まさ馬なることを拝てそれ思乃
極中とをひ来ありさせ法べきまよさと拝て志うろ命され家乃極
まを思ひな法てそのれしそて鬼神とあざむこころと
もくつまるんまで。命をもちるまわくさるもうぬもの鳴た。
こおまよろひの神とそぬしろ病んの中しそふとをかと達。

判家もれ成とけまじ今ふ弁著又も志さるとれなすらく
こかなまどもさってぬ神よりて世けじとの代ろれ極よ人
の年を世平もう極とおもて五ぞなうまぬもの々となす食
そうハれこのものまそてこそおきまがハつまさいかふおよびざ
なまなるも身とたまけゆうん拝よ我からくろふこう家
をもこれなそても平まぬとそふうなれにしなき孫れ見
にかうてゆとてかうハ世拝で死出みろ君もいつうきつく
アまと思ひ法ふ法あれひざ備づきて君乃ま死のかな
くろをとなる親乃大かるまと死出害乃上れぞ悪さるを
ろかくこそかなふなをれんと思ひてさてあるとてそればくるも
たおくろこばくこれ酒とふて拝うなるも姫と孫また
かくらけニ死出一とハ君乃法前はさこまでけ。ニどとまく
立てほく村あまてかしたかうまてされか酒いほくせてち

いはじとおもひてわらんべそもしほにくもそでかくすぞせぬ程さ
けとてありしところがたちもなくれてしほうけくさどのこて酒も
ゆきもとめもおもとく今敵は早や事なしとて敵はそれは
いたずとおもはゆきは十二月廿三日なりけるさうとも勢ひ
もあらじいざやかりて合戦のまひてかけしをさせてくだらん
ひえげこち谷とうすそでは出給ひきまかむけるさぎこちら
かりければ吉野川のわたりのきところ谷々の衆徒
のなかひへよろひとそそいをかけし我ら世にかくれもあ
ぐりひもそでよまするものかし今はきすこそ抱かじぞ
きげこち谷のこばのなかれよろひもをもとしこすこいはみ
ぬぎすてて前のおそれもなく北年むしと月の寸ゑ
さればこれ乃沙ふ奥方へかんばせれば手は付かむで
一條今出川の邊にぞ忍びゐける

のなくと立ち帰りわらひは未練とおもひてれば此
判官に入るもあらでゆくもあさらくちうれ
さのふ人も為に判官なさみひと人も給をさぎし
こともこつましかのこで忠さる下とやさしきめし幼
はさきまさきて十二月廿三日の夜ふら明けて南
都の勧修坊のもとへぞ忍びける

義經記巻之第五終